

ルカによる福音書7章28-30節 「後の者が先になる」

1A ヨハネよりも偉大な御国の子 28

2A 取税人たちとパリサイ派 29-30

1B ぶどう園で働く兄と弟

2B 不道德の女とパリサイ派シモン 36-50

3A 信仰と行いによる義

1B カインとアベル

2B パリサイ派と取税人の祈り

3B 五時からの労働者

4A 律法的生活から御霊の生活へ

1B 律法との関係に死んだ私

2B キリストの死に働く御霊

本文

ルカによる福音書7章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは6章まで来ました。午後に7章全体を読みますが、今朝は7章28-30節に注目します。「28 わたしはあなたがたに言います。女から生まれた者の中で、ヨハネよりも偉大な者はだれもいません。しかし、神の国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。29 ヨハネの教えを聞いた民はみな、取税人たちでさえ彼からバプテスマを受けて、神が正しいことを認めました。30 ところが、パリサイ人たちや律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けず、自分たちに対する神のみこころを拒みました。」

イエス様の宣教は、バプテスマのヨハネの宣教から始まりました。彼が、「3:8 悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」と叫んで、その呼びかけに応答する人々が大勢現れました。悔い改めるためにヨルダン川に入って、ヨハネからバプテスマを受けました。その大勢の中には、取税人たちさえいました。彼らは、ローマのために税を徴収し、しかもだまし取って自分の懐に入れていたような者たちでした。しかし、彼らは悔い改めたのです。神が正しいことを認めたのです。けれども、パリサイ人たちや律法の専門家たちは、悔い改める必要を感じなかったのでしょうか。それで、彼からバプテスマを受けませんでした。神はすべての人が悔い改めて滅びに至らないことを願っておられますが、その御心を彼らは自ら拒んだのです。

なぜ、神の義を求めていたはずのパリサイ人や律法学者たちが、神の義を拒み、そしてこれまで罪の中に生きてきた取税人のような人々が悔い改めて、神の義を得ることができたのか？その理由を探って行きたいと思います。

ところで、私がまだ求道していた高校生の時のことを思い出します。宣教師の人から、こう言われました。「クリスチャンになったら、良い人になれると思ったら間違いです。自分の罪深さ、いたるなさをもっと知るようになります。」一見矛盾する言葉です。クリスチャンになったら、そりゃあ、自分が良くなるはずでしょう、と。自分がさらに罪深いと分かるのであれば、クリスチャンになる意味がないのではないかと、人間的には思うわけです。けれども、信仰をもってそうだと分かりました！今まで自分はそれほど悪い人間だと思っていませんでした。クリスチャンになって、もっと自分の罪深さを実感しました。逆説的に聞こえますね？けれども、パリサイ人が求めていたのは、この「さらに良くなること」なのです。もっと良い人間になる、ということなのです。しかし神は、人をこよなく愛されているがゆえ、自分の至らなさ、罪深さを知る人間にご自分の義を示されます。

1A ヨハネよりも偉大な御国の子 28

イエス様がまずこう言われます。28 わたしはあなたがたに言います。女から生まれた者の中で、ヨハネよりも偉大な者はだれもいません。しかし、神の国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。

神の国のどんな小さい者でさえ、ヨハネよりも偉大だということです。ヨハネが、女から生まれた者として、つまりすべての人間よりも偉大だということです、けれども、彼の偉大さも、御国に入ることになれば、大したことはないということです。それだけ御国に入るとは、偉大なことだということです。ペテロは第二の手紙で、神が選び召されたことを確かなものとして行きなさいと言った後でこう言いました。「1:11 私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国に入る恵みを、豊かに与えられるのです。」恵みなんですね。

そのペテロは、イエス様とこんなやり取りをしたことがあります。カペナウムに着いた時に、神殿税を集める人たちがペテロのところへやってきました。「あなたがたの先生は神殿税を納めないのですか。」彼はイエス様に尋ねる前に、その場で「納めます」と答えてしまいました。けれどもイエス様は優しいです、先にペテロに語られます。「マタ 17:25-26 シモン、あなたはどう思いますか。地上の王たちはだれから税や貢ぎ物を取りますか。自分の子たちからですか、それとも、ほかの人たちからですか。」ペテロが「ほかの人たちからです」と言うと、イエスは言われた。「ですから、子たちにはその義務がないのです。」けれども、躓かせないために釣りをして、最初に釣れた魚の口を開けると銀貨が見つかるから、わたしとあなたに分として納めなさいと言われます。自分たちのことを、税金を納める必要のない王族の子たちなのだというのです。イエスさまは父なる神の独り子であり、そして弟子たちはキリストにあつて神の息子たちであります。道理で、御国でどんな小さな者も、ヨハネよりも偉大なのです。これだけの大きな恵みを与えられているのです。

2A 取税人たちとパリサイ派 29-30

バプテスマのヨハネは、その御国が近づいたのだから悔い改めなさいと説いていました。そして、悔い改めた者たちがバプテスマを受けます。大勢の人々がバプテスマを受けました。ところが、パ

リサイ派と律法の専門家たちは、バプテスマを受けませんでした。28-29 節をもう一度、お読みします。「29 ヨハネの教えを聞いた民はみな、取税人たちでさえ彼からバプテスマを受けて、神が正しいことを認めました。30 ところが、パリサイ人たちや律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けず、自分たちに対する神のみこころを拒みました。」

1B ぶどう園で働く兄と弟

このことは、他の箇所でもイエス様は語られていました。「マタ 21:28-32 ところで、あなたがたはどう思いますか。ある人に息子が二人いた。その人は兄のところに来て、『子よ、今日、ぶどう園に行って働いてくれ』と言った。兄は『行きたくありません』と答えたが、後になって思い直し、出かけて行った。その人は弟のところに来て、同じように言った。弟は『行きます、お父さん』と答えたが、行かなかった。二人のうちのどちらが父の願ったとおりにしたでしょうか。」彼らは言った。「兄です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。取税人たちや遊女たちが、あなたがたより先に神の国に入ります。」

取税人や遊女と言え、それだけで神の国から離れているとみなされます。しかし、イエス様はとてもしかり易い喩えを語られました。初めに、そういった人々は、このぶどう園の兄のようです。「ぶどう園に行って働いてくれ」と言っても、「行きたくありません」と言いました。神にあからさまに反抗しているのです。けれども、後で思い直して、出かけて行きました。ですから、これは良いことなのです。取税人や遊女たちが、先に神の国に入っているのです。

私たち人間社会には、このような恵みがありません。過去に神に反抗するようなこと、あからさまな罪を犯していたら、一生涯、その罪や汚れは残っていると考えます。いや、自分が罪を犯したのでもないことまでを、ずっと残っている汚れとして考えますね。例えば、最近、テレビにも良く出演する女性の学者さんが、自伝を書きまして、その中で自分が中学生になったばかりでしょうか、集団レイプをされたことを書いているそうです。警察にも届けなかったそうです。けれども、世間の本を出すことによって明らかにしました。しかし、私たちの教会に以前、アメリカから短期宣教旅行で来た方がいました。20 代の若い女性ですが、二度、レイプされたことをお話しされていました。

けれども、自分が罪を犯したのでも、ましてや被害を被っていても、キリストのうちにある者は、新しく造られたのです！古きものは、すべて過ぎ去ったのです。パウロが、自分の過去を引きずって歩いたでしょうか？むしろ、自分はキリスト者を迫害したことで罪人のかしらだけれども、「1 テモ 1:16 イエス・キリストがこのの上のない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」と語っています。先例になる、と言っているのです。今、悔い改めて、罪赦された確信と平安を持っていて、それで生きているならば、過去のことは全く問われないのです。むしろ、それこそが神の恵みの証しになっています。

けれども、私たちはいつも、「良い人間にならないといけない」という考えですと、「悔い改めなさい」と言われた時に、「ええ、なんでそうやって私の努力を否定するのですか？」と反発します。それで、悔い改めという姿勢で臨むことができません。ここに出て来る弟のようです。「私は、これこれのことをやっています」と口では主張するのですが、行いが伴っていないのです。

2B 不道德の女とパリサイ派シモン 36-50

イエス様が、本文、ルカ7章でこのことを話された後で、36節以降に、実際の話が出て来ます。イエス様が、パリサイ派シモンの家に招かれました。その時に、不道德な女がイエス様のところに来ました。そして涙を流し、イエス様の足に落ちたので、それを髪の毛で拭き、足に口づけして香油を塗りました。シモンは、「イエスが預言者だと言うなら、この女が罪深いということを知っているはずだ」と心で思いました。それで、イエス様は譬えを語られます。五百デナリ借りている人と、五十デナリ借りている人が、どちらも借金を帳消しにしてもらったら、どちらが金貸しをより愛するでしょうか？と尋ねたら、シモンは「より多くを帳消しにもらったほうだと思います」と答えました。その通りですね。

そして、イエス様は、シモンが考えているのと正反対のことを言われます。シモンは自分のほうが義人だと思っていました。女は罪深いと思っていました。ところが、その場では正反対だったのです。シモンは、イエス様を自分の家に招待し、食事まで与えていたのに、客としてもてなすのには、当時の習慣からすると、ずいぶんと失礼なことをしていたのです。家に入って来る時に、客に対して足を洗います。当時はサンダルで、埃で足が汚れるので、中に入る時にしもべが足を洗うのですが、客に対してそういうもてなしをします。そして、口づけをします。これは、日本の習慣でしたら、おじぎをするぐらいです。とても丁寧なおじぎでしたら、正座しておじぎをして、お客さんをお迎えするぐらいのことはしますね。それが当時であれば、今でもそうですが、口づけです。それもありませんでした。それから、頭に潤いを与えるためにオリーブ油を塗るものですが、それもありませんでした。さうとうれを失うことを行っていたのです。

しかし、それを結果的には補うかのように、女はその全てを行ってくれました。涙で足を拭き、足に口づけをします。これは相手を王のようにみなして、自分を卑しめている姿です。そして、油を塗っています。頭ではなく、足というのは、そこまでの価値がないことを示しています。礼を尽くしていたのです。

一見、正しいことをしているように見えて、正しいことを言っているけれども、とても失礼なことをすることがあります。そして、人間的には、社会的には、間違っているかのに、見える人でも、そのすることを見たら、そこに愛があって、敬意があるということがあります。私たちに求められている視点は、絶えず後者です。表面的な正しさではなく、真実な愛の行いです。

3A 信仰と行いによる義

そこで、なぜこのような違いが出て来るかを考えてみたいと思います。一方は正しく見えても神に拒まれ、もう一方が正しいように見えなくても受け入れられるという証しが、聖書には数多く書き記されています。

1B カインとアベル

創世記 4 章の、カインとアベルの話がそうでしょう。アダムとエバの間にカインが生まれ、それからアベルが生まれました。アベルは羊飼いでしたが、カインは大地を耕す者でありました。主にささげ物をする時に、カインは大地の実りを捧げたのですが、主はそれに目を留められず、アベルは自分の羊の肥えたものを、いけにえにして捧げました。それを神は受け入れられました。カインは激しく怒って、落ち込んだのです。

カインとアベルの違いは何でしょうか？カインは、自分の耕して汗水流してできたものです。自分の行いの成果を神に認められようとしたのです。アベルは犠牲です。自分の飼っている羊です。これを敢えて、神の前で屠って、捧げたのです。なんでもったいないことをするのか？また、自分の身を切るような、自分のものをむしろ否定するような行いです。一方では自分の成果を認めてもらおうとして、もう一方では自分の成果をむしろ捨て去ったのです。

アベルは、信仰によって神に近づきました。神の前に出るのには、自分のものを犠牲にする必要があることを知っていました。神は、罪を赦すのに、いのちを要求します。そのいのちの象徴である血が流されなければ罪を赦すことができません。アベルは、それで血を流すいけにえを捧げたのです。自分が何を行っているからではなく、神が備えてくださる罪の赦しを信じたのです。それゆえに、自らの家畜である子羊を、しかも肥えたものを選んで捧げたのです。

2B パリサイ派と取税人の祈り

パリサイ人の祈りと、取税人の祈りの中にもこの違いが表れています。「18:9-14 自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たちに、イエスはこのようなたとえを話された。10 「二人の人が祈るために宮に上って行った。一人はパリサイ人で、もう一人は取税人であった。11 パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。12 私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。』13 一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』14 あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。』」

この話で、パリサイ人は自分が何を行っているかを神に話しています。その反面、取税人は、神が自分を憐れんでくださることを願っています。自分のしたことは、罪人として自分を否んで、そして神に憐れみを請うたのです。それで、この取税人は義と認められた、つまり、今まで罪を犯したことのないようにみなしてくださいました。取税人は自分を低くしました、パリサイ人は自分を高くしました。神はこの人間の営みを逆転されます。低くする者を高くし、高くする者を低くされるのです。

3B 五時からの労働者

私たちは、誠実に働き、誠実に仕えるところにおいて、陥ってしまう過ちがあります。ぶどう園で日雇い労働者を捜している主人の話が、それに当たります。一日一デナリの約束で、九時ごろから午後六時まで働かせました。ところが、人が足りないので十二時頃にも三時頃にも雇いました。なんと五時にも雇ったのです。そして終業時間になったら、なんと主人は五時頃に雇われた者たちから給料を支払い、一デナリを渡しました。そして九時から働いた者たちは自分たちはもっともらえるのかな？と思ったら一デナリだったのです。それで文句を言いました。けれども、主人は、「あなたがたと一デナリの約束をしたではないか？私は、この人たちにも同じように支払いたいのだ。それとも私が気前がいいので、あなたは妬んでいるのですか。」と言いました。(以上、マタイ 20 章)

自分たちが誠実に働いている時に、自分が神の恵みから始まっていることを忘れているのです。神が自分を救ってください、その感動によって愛が与えられ、その愛によって神に仕えます。その愛の中にいれば、同じように神から永遠の命という大きな報いが与えられる後の人たちを見ても、妬むことはありません。むしろ、共に喜びます。後に来た人と、初めに来た人との間には差別がありません。そして何よりも、自分は僕にしか過ぎません。主人に仕えているのであって、すべての報酬は主人が決めることです。ところがいつの間にか、自分には何かの権利があると思ってしまう、それを主張し始めるのです。これは、自分が神に仕えている中で、いつの間にか自分の行いに拠り頼むことによって起こってしまうことです。

4A 律法の生活から御霊の生活へ

1B 律法との関係に死んだ私

ここで大事なものは、私たちがどこかで、律法に対しては死んでいるというように見なすことができるか？であります。「律法に対して死ぬ」というのは、「自分が良いことを行って、それによって「君は良い子だね」と認められる関係に死ぬ」ということです。律法に対して死ななければ、自分は神に仕えている、従っているとしている中で、必ず自分が認められてほしい、居場所がほしいという欲望が出て来てしまいます。

パウロはその葛藤をローマ人への手紙 7 章で話しています。彼は、自分が律法を守ろうとしたら、自分がかえって罪深いことに気づいた。それを行おうとしようと思えばそれだけ、それができないどころか、やってはいけない悪いこともまでもやっている自分に気づく。このがんじがらめの体から、

だれが私を救ってくれるのだろうか？と叫んでいます。それが 7 章の最後のほうです、「だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」そうです、彼は自分が何かをすれば、良くなるはずだという、律法に生きる関係に死にかけているのです。だれが救い出してくれるのか？と、救いを自分の外に求めています。自分自身の中に救いがないのです。

2B キリストの死に働く御霊

しかし、8 章には「イエス・キリスト」が主語となって話が続きます。「1 今や、キリスト・イエスにある者が罪によって定められることはありません。」そして、「3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。」そうです、自分が何をするのか？ではなく、キリストが私のためにして下さったこと、キリストが自分の肉の弱さ、そこにある罪のための肉体をもって処罰を受けて下さったこと。ここに戻るのです。いや、私たちはキリストの十字架から卒業してはいけないのです！「もうイエス様の十字架を信じているから、これからは自分の行いで努力するのだ！」ではないのです。自分はキリストと共に十字架に付けられているのです。自分ではなく、もはや自分のうちに生きておられるキリストを信じることによって生きます。

その信仰に生きる時に、御霊が働いてくださいます。御霊が働いてくださるのには、機械のスウィッチを付けるように、スウィッチを押さないといけません。「信仰」と書かれたスウィッチを押すのです。ところが多くの人が、「行い」と書いてあるスウィッチを押してしまうのです。そして、パリサイ派の人たちのように、自分が神に仕えていると思っていながら、神の前に心が柔らかくされていないので、御霊の流れが来ないのです。良い行いは、あくまでも、この不道德の女のように愛から生まれてきます。